

浅野研眞個人誌

# 佛陀

復刻版全一卷

◎収録内容

第一巻第一号(通巻第一号)〜第七巻第五号  
(通巻第六九号)

■体裁 A4判・2面付け・上製・函入

総約525頁(原本総912頁)

解説・総目次・索引付き(巻末)

■解説 菊池正治(久留米大学文学部教授)

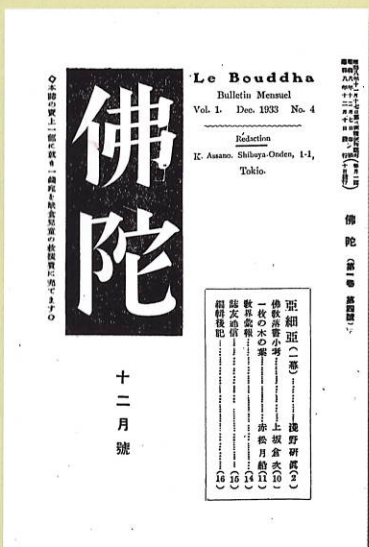
■推薦 赤松徹眞(龍谷大学学長)

長谷川匡俊(淑徳大学理事長)

■刊行 2013年6月

■定価 本体25,000円+税

ISBN978-4-906943-19-7



関連図書のご案内

【編集復刻版】

## 仏教植民地布教史 資料集成

〔朝鮮編〕全七巻

●巻数 全7巻

●体裁 A5判・上製・総約3,880頁

●編・解題 中西直樹(龍谷大学文学部教授)

※解題は各巻の巻頭に収録

●刊行

第1回配本 2013年6月

【第1巻〜第3巻】

本体揃価格 75,000円+税

ISBN978-4-906943-10-4

第2回配本 2013年12月

【第4巻〜第7巻】

本体揃価格100,000円+税

ISBN978-4-906943-14-2

●揃価格

全7巻 ●本体揃価格175,000円+税

●推薦 坂口満宏(京都女子大学教授)

柴田幹夫(新潟大学国際センター)

●全巻構成

第1巻 日本仏教の布教概要

第2巻 統監府・総督府年次刊行物(1)

第3巻 統監府・総督府年次刊行物(2)

第4巻 三・一独立運動後の総督府と仏教界

第5巻 真宗大谷派の布教動向

第6巻 日蓮宗の布教動向

第7巻 諸宗派の布教動向(曹洞宗・浄土宗・本願寺派・真言宗)

●表示はすべて税別

### 三人社

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町4 白亜荘

電話 075-762-0368

FAX 075-762-0369

振替 00960-1-282564

※図書館様・書店様へ

小社は少数出版のため取次口座はございません。ご注文は直接上記までお申し込みください。

## 十五年戦争下における一仏教徒の軌跡をたどり、 仏教の戦争協力と戦争責任を検証する――

浅野研眞個人誌

# 佛陀

Le Bouddha

復刻版  
全一卷

1933年9月〜1939年6月

浅野研眞の晩年の個人誌『仏陀』は、1933年9月から1939年6月まで続いた月刊誌である(通巻69号)。

創刊の意図は大乗仏教の精神と歴史上の仏教者の救護活動に学びながら、現代社会に理想の「社会案」を提示・実践しようとするものであった。聖徳太子の教えから抽出した「農村寺院のセツルメント化」論や広く青年層に呼びかけた「佛教社会学院」の開設などは、現在においても注目に値する。

しかし昭和初頭にマルクス主義的立場にあった浅野の思想は、時代とともに推移し、国家主義的な宗教観へと変化していく。

十五年戦争下における浅野個人の思想と行動を読み解き、同時に、仏教の戦争責任を考察する稀少な資料として全号を復刻する次第である。

●体裁 A4判・2面付け・上製・函入

総約525頁(原本総912頁)

解説・総目次・索引付き(巻末)

●解説 菊池正治(久留米大学文学部教授)

●推薦 赤松徹眞(龍谷大学学長)

長谷川匡俊(淑徳大学理事長)

●刊行 2013年6月

●定価 本体25,000円+税

ISBN978-4-906943-19-7

三人社



# 『仏陀』復刻版刊行に寄せて

赤松徹眞 (龍谷大学学長)

この度、菊池正治先生の浅野研眞研究の成果に基づいて、浅野の個人誌『仏陀』復刻版が刊行されることになった。まことに喜ばしいことである。今から八〇年前、一九三三年九月に創刊された『仏陀』には、浅野の垣間見た現実への危機認識、ことに仏教をフィルターとした現実認識と実践課題が端的に語られている。まさに日本の国際連盟脱退から「第二次世界大戦勃発」直前までの国内外の政治社会の状況のまったただ中で仏教の実践的課題を見出そうとした浅野の歩みと同時代史が『仏陀』から読み取れよう。

『仏陀』創刊号に浅野は、「大乘佛教と社会実践」と題して、  
惟ふに、現代ほど、心あるものにとつて、奮起を要すべき秋はない。  
まこと文字通りに「三界無安猶如火宅」の現社会相は一体全体、今後どうなるかと云ふのか？

農村の殺人的窮乏、街頭にあふるゝ幾十萬の失業者群の飢餓。全国二十萬にあまる欠食児童のいたけない有様、一年数百件にあまる親子心中！  
と述べている。私たちは、今日の非正規雇用者の激増と貧困格差、東日本大震災と福島原子力発電所の深刻な危機的事態などの個別事象の相違にかかわらず、本質的には類似した時代相に生きている。真摯に時代状況に向き合った浅野の個人誌『仏陀』復刻版の刊行は示唆的であり、光彩をはなつものである。多くの皆さんに届くことを念じ、ここに推薦する次第である。

# 社会と仏教、戦争と仏教

— 浅野研眞の『佛陀』誌から —

長谷川匡俊 (淑徳大学理事・長谷川仏教文化研究所長)

このたび、浅野研眞に関する新史料の発掘収集と研究を推し進めてこられた近代仏教社会事業史研究の第一人者・菊池正治氏によって、これまで不明であった浅野の晩年の言説を収める個人雑誌『佛陀』全巻(一九三三・九〜一九三九・六、通巻六九号)の復刻版が三人社から刊行される運びとなりました。

私が浅野研眞の名を知ったのは大学一年の夏のことです。父の書棚に黒のハードカバーに白背文字の一冊『日本仏教社会事業史』が目にとまり、結局、本書の抜き書きに等しいレポートを書いて休み明けに指導教授に提出したのを思い出します。その後の浅野への関心は、近代における仏教社会事業の歴史研究に取り組むようになって、再燃しつつあったのですが、今回の『佛陀』復刻刊行は、これまでの浅野研究に見直しを迫る内容に満ちています。

浅野は若くして没していますが、フランス社会学を学び、同時にマルクス主義の立場から昭和初期には新興教育運動や反宗教運動にも力を注ぎます。彼の学的態度を貫いていたのは、社会学徒としての眼と批判的仏教者としての社会的実践的性格であって、それが脚下の日本仏教の歴史に向けられたとき、『日本仏教社会事業史』(一九三四)に結実しました。しかし、『佛陀』誌の後半部を彩る言説と行動からは、もはや批判的「仏教復興」の旗手たる面影は消え、戦争協力一色に変じていく様相が観てとれます。戦時下における仏教者の動向、宗教と社会との関わり、近代仏教などの研究に恰好の素材を提供する本誌をお薦めいたします。

## 大乘佛教と社会実践

浅野 研眞

序説——現代の社会不安

惟ふに、現代ほど、心あるものにとつて、奮起を要すべき秋はない。まこと文字通りに「三界無安猶如火宅」の現社会相は一体全体、今後どうなるかと云ふのか？  
農村の殺人的窮乏、街頭にあふるゝ幾十萬の失業者群の飢餓、全国二十萬にあまる欠食児童のいたけない有様、一年数百件にあまる親子心中！さてはギヤングに、エロ・グロ・テロ！  
かうした時代に、かうした火宅に於て、マハヤナ佛教は、如何に社会を觀じ、如何にその世界觀を規定し、如何に佛教的社會信條なり社會案なりを設定すべきであらうか？  
また引いては、行き詰つた宗門財政の問題、寺院經營の問題、さては宗門教育の問題、等々……現代社会不安のまにまに、これらの諸問題は、一段と混濁と困難とを來してゐるではないか？

本論——大乘佛教の社会実践

佛教は二千五百年以前に印度に發生した一箇の宗教的イデオロギーである。しかし、それは我が日本に於てこそ、最も根強き發達を來した。従つて日本文化には遙かなる其の歴史的背景があるのだ。また従つて、そこには社会的・歴史的に現代へ更生さるべき指導精神が掘り求められ得ないと何人が斷言しようか？  
勿論、過去の業蹟の研究は、單に廢坑を掘りくり返してゐることを以て能事とするものでない。そこから何らかのインスピレーションが求められ得なければならぬ。  
現代に生きるものは、現代の問題を問題とする

## 八紘一字の眞意義

— 皇道の世界的光輝 — 浅野 研眞

×：……此の「八紘一字」なる成語は、長くも、神武天皇が、東征の大業成り、大和の橿原に帝都を經營するに當つて命を下された其の中に、  
「六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩ひて字と爲むこと亦可からずや」  
とあるに起原するものであつて、實に聖國の大精神が其處に躍動してゐるものである。  
×：……少しく、その字義を考ふるに、まづ「八紘」とは「八方の隅または」方角を云ひ、別に「八流」とも云ふが、その時は「八方の遠い涯と云ふこととなる。即ち「世界の涯」までも、とか、「天下のすべて」の意である。  
×：……「一」とは「一家」といふ字義であつて、全體として統一と秩序とを有する家族の如き親和的共同體の意である。  
×：……従つて「八紘」字とは皇化にまつる一切の禍を拂ひのけ、世界中の人類をして、その志を伸張せしめ、相傍り相扶けて全體として親和的な一大共同體を世界的スケールに於いて建造することであらばならぬ。  
×：……然し、それは決して、他國に見る如き霸道主義に立脚する侵略的思想、即ち「ウツク」ものであつてはならない。  
×：……それは何處までも、世界平和、人類共榮を實現的に實現せんとする徳治主義、即ち「シラス」ものでなくてはならぬ。  
×：……即ち「皇道の世界的光輝」こそが「八紘一字」の眞義であり、その最後の到達のためにこそ、我が「聖戰」は戦はれねばならぬのである。

## 浅野研眞略年譜



- 1898年 愛知県中島郡真宗大谷派寺院永龍寺の次男として誕生(7月25日)
- 1917年 私立尾張中学校(真宗大谷派系)卒業。卒業後、京都・大徳寺にて禅修行(約2年間)、その後短期間、函館刑務所で教誨事業に従事
- 1925年 日本大学卒業(円谷博に師事し社会学を修める)。卒業と同時に同大社会学研究室助手、東京労働学校教務主任
- 1928年 文部省より社会学・社会教育調査研究のためにフランス留学を命ぜられる(中途、国費留学資格が剥奪され私費留学に切り替わる)
- 1929年 教育文芸家協会のエドキンテルン加盟について仲介の労をとる
- 1930年 フランス留学より帰国。直後、全日本教員組合準備会に参加、同時に新興教育研究所創立に参画。「マルクス主義と教育問題」(発売禁止処分本)、「新興教育学」(以上訳編)、「プロレタリア教育の諸問題」(単著、発売禁止処分本)などを相次いで出版
- 1931年 高橋順次郎らの全日本佛教青年会同盟創設に参加
- 1932年 友松円諦らと仏教法政経済研究所を創設。「無神論と反宗教運動」、「唯物史観と仏教」、「社会の変革過程と宗教」などを出版。仏教総合雑誌「現代仏教」の編集者に迎えられる
- 1933年 友松、長谷川良信、妹尾義郎、林靈法らと仏教社会学会設立。「運如上人の経済思想」、「宗教法規全集」など出版。雑誌「佛陀」発刊
- 1934年 「日本仏教社会事業史」出版。仏陀社ゼツルメント創設
- 1935年 仏教社会学院開設。「仏教社会学研究」出版。全日本仏教青年会聯盟国際仏教通報局幹事就任
- 1936年 邪教撃滅連盟結成。朝鮮、中国への海外視察旅行。仏教振興会創設
- 1937年 外務省・日暹親善使節としてシヤム(現・タイ)、カンボジア、支那(現・中国)、台湾など、各国の宗教事情を視察
- 1938年 樺太視察旅行。仏教社会学院を仏教文化学院と改称
- 1939年 雑誌「佛陀」終刊、死去(7月7日、享年41歳)、法名一向院釋研眞